第1講　論説文①　抽象的な文章を読む

対比と言いかえ／抽象語の読みかえ／抜き出し／ひらがなで答える空欄／内容一致

読み方のコツ 10分 | 例題 10分 | 練習 30分 | 作文 15分 | 確認テスト 10分

読み方のコツ1　対比と言いかえを見つける

入試の形　入試の現代文は評論で、芸術・ことば・学問など抽象的な話題が多い。本文は一題約二千字。長い文章でも、骨組みは「対比」と「言いかえ」でできている。

一　**対比は、二つの箱に分ける**　「〜に対して」「一方」「〜ではなく」に印をつけ、本文のことばを二つの箱に分けて読む。Aの箱のことばとBの箱のことばは、一組ずつ向き合っている。

二　**筆者の考えは、対比の片方にある**　「AではなくB」のB、「もちろんA。しかしB」のBが筆者の立場である。まとめ文の答えも、Bの箱にあることが多い。

三　**言いかえは＝で結ぶ**　「つまり」「すなわち」「〜のである」の前後は同じ内容で、抽象的な言い方とくわしい言い方が＝で結ばれている。抜き出しの答えは、傍線部と＝で結ばれた別の場所にあることが多い。

四　**具体例は（　）でくくる**　体験談や「たとえば」の部分はくくり、そのあとの「こう考えると」「このように」の文に線を引く。

問一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

自動販売機は、いつ、だれが買っても、同じ品物を同じように出す。これに対して、町の小さな店の主人は、客の顔を見て声をかけ、その日のおすすめを教えたり、重い荷物の配達を申し出たりする。つまり、自動販売機が同じものをくり返し渡すための機械であるのに対して、店の主人の仕事は、その場に応じて判断する営みなのである。

筆者は店の主人の仕事をどのようなものだと述べているか。本文中から十三字で抜き出しなさい。

問二　同じ文章で、自動販売機はどのようなものだと述べているか。本文中から十六字で抜き出し、初めの五字を書きなさい。

読み方のコツ2　抽象語の読みかえ・ひらがなの空欄・内容一致

抽象語と比喩を読みかえる　「知識」「営み」のような抽象語は、その文章の具体例に戻すと意味がはっきりする。比喩は「何を何にたとえたか」と「どの点が似ているか」の二つを確かめる。「～という網」「～の箱」とあれば、そのあとの説明の文から似ている点を探す。

ひらがなで答える空欄　入試には、本文中の空欄に入ることばを「ひらがな五字で」書く形がある。答えはそのままの形で本文にあるとはかぎらない。空欄のある文の前後で何と何が対比されているかを見て、入る意味を先に決める。次に、その意味のことばが本文の別の場所にないかを探し、指定の字数にする。

内容一致　選択肢を二つか三つに区切り、それぞれを本文と照らし合わせる。一か所でも本文とずれていれば選ばない。

ずれの三つの形　①言いすぎ（「すべて」「必ず」「だけ」「～すべきである」）②本文に書いていない比較（「Aのほうが Bより」）③原因と結果のすりかえ。前半が本文どおりでも、後半で本文からはなれる選択肢に注意する。

問一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

台本は、舞台にのせるまでは完成していない。そこには、せりふの間も声の高さも書かれていないからである。役者はその空白を、自分の体を使って一つずつ埋めていく。台本が設計図にたとえられるのは、このためだろう。

台本が設計図にたとえられるのは、台本のどのような点によるのか。本文中から十六字で抜き出しなさい。

問二　次の文章の［　　］に入れるのに最も適していることばを、本文の内容から考えて、「い」で終わるひらがな五字で書きなさい。

感謝のことば「ありがとう」は、「有り難し」ということばから生まれた。「有り難し」は、もとは「有ることが難しい」、すなわち、めったにないという意味であった。このことばが最初に表していたのは、今の「ありがたい」のような感謝ではなく、［　　］ことに出会った驚きだったのである。

例題　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

芝居の舞台では、客は目の前の衣装や道具を見て、物語の世界に入っていく。これに対して、落語には舞台装置がない。落語家は座ぶとんの上に一人で座り、扇子（せんす）と手ぬぐいだけで、何人もの人物を演じ分ける。

落語とは、見せること以上に、客の［　A　］に働きかける芸なのである。扇子を箸に見立ててそばをすする音を立てれば、客はそれぞれの頭の中に、湯気の立つそばを思いえがく。雪の夜の話なら、客は自分の知っている雪を降らせる。

したがって、すぐれた落語家とは、多くを見せる人のことではない。客の想像力が働く余地を残せる人である。何もかも説明された話は、かえって客の頭の中に何も残さない。

（創心館オリジナル文章）

例題の問いと解き方

問一　芝居と落語のちがいを次のようにまとめた。［　a　］に入れるのに最も適しているひとつづきのことばを、本文中から九字で抜き出しなさい。

芝居の客は［　a　］を見て物語の世界に入るが、落語には舞台装置がない。

問二　［　A　］に入れるのに最も適していることばを、本文中から三字で抜き出しなさい。

問三　筆者の考えるすぐれた落語家とはどのような人か。本文中から十五字で抜き出し、初めの五字を書きなさい。

解き方　問一　「これに対して」が対比の印。前が芝居の箱、あとが落語の箱である。「を見て」を本文で探すと、前は**目の前の衣装や道具**（九字）。

問二　空欄の文は抽象的なので、あとの具体例で読みかえる。そばも雪も、客が頭の中に作り出している。これを一つのことばで言っているのが第三段落の「客の想像力」。**想像力**。「見せること」と向き合うことばである。

問三　「すぐれた落語家とは、多くを見せる人のことではない。」の「ではない」に注目する。Bの箱は次の文。「客の想像力が働く余地を残せる人」が十五字。**客の想像力**。

練習　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（入試の形）

春の朝、野鳥にくわしい知人に案内されて、里山を歩いたことがある。ふと足を止めた知人は、「あのコナラの枝に三羽いますよ」とささやいた。私は同じ方向に目を向けたが、そこには新芽のふくらんだ枝が重なっているだけである。双眼鏡を借りて長いあいだ探し、枝の一部だと思っていたものがわずかに身じろぎをしたとき、私はようやく気づいた。鳥はずっとそこにいたのだ。同じ場所に立ち、同じ光を受けていたにもかかわらず、知人に見えていたものが、①私には見えていなかったのである。

私たちはふだん、目の前にあるものは、だれの目にも同じように映っていると思っている。目をカメラのようなものと考え、開いてさえいれば、外の世界がそのまま写しとられると信じているのだ。［　A　］、カメラが画面のすみずみまで同じ重みで記録するのに対して、人の目はそのようには働かない。人は、目に入ってくる無数の色や形のうち、意味のあるものだけを拾い上げ、残りを背景として退(しりぞ)けている。何を拾い上げるかを決めているのは、その人がそれまでに身につけてきた知識である。知人の頭の中には、鳥の姿や大きさだけでなく、どの季節にどの高さの枝を好むかといった知識があった。［　B　］、知人の目は、重なり合う枝の中から、鳥のいそうな場所を前もって選び出すことができたのだろう。見ることは、外から光を受け取るだけの働きではない。知識という②網を世界に投げかけ、かかったものをすくい上げる働きなのである。

こう考えると、「先入観を捨てて、ありのままに見なさい」という助言は、言うほどたやすいものではない。知らない外国語の放送を聞いても、私たちの耳には切れ目のない音の流れしか届かないが、そのことばを学べば、同じ音の流れの中から単語が聞こえてくるようになる。目についても同じことが言えるはずだ。網の目があるからこそ魚はすくえるのであって、網を捨てた手には何も残らない。かりに知識をすべて取り去ることができたとしても、そこに現れるのは澄みきった真の世界ではなく、意味をもたない色と形の広がりにすぎないだろう。

もちろん、知識が見ることをさまたげる場合があるのも確かである。たとえば、絵を習いはじめた人に机を写生させると、手前が広く奥がせまい実際の見え方ではなく、長方形に近い形を描いてしまうことが多い。天板は長方形であるという知識が、目に映っている形を押しのけてしまうのだ。描くべきものは目の前にあるのに、手が従っているのは頭の中の図形なのである。同じことは、見慣れたものについても起こる。毎日通る道の家並みを、私たちはよく知っているつもりでいる。しかし、角の家の屋根の色をたずねられて、すぐに答えられる人は少ないだろう。「いつもの道だ」と思った瞬間に、私たちは目を休めてしまうのである。「知っている」という思いは、ものに貼られた便利な札のようなもので、札を見ただけで、中身をあらためる必要はなくなったように感じられる。目の前のものが札のとおりだと分かれば、それで用はすんでしまう。このとき私たちがしていることは、「見る」というより「［　C　］」と呼ぶほうがふさわしいだろう。③知っているという思いが、見ることの終点になってしまうのである。

（前のページの文章の続き）

では、知識は目を開くものなのか、それとも閉ざすものなのか。同じ知識が正反対の働きをする以上、問題は知識そのものではなく、その用い方にあると考えるべきだろう。知識を答えとして用いるとき、目の前のものは、すでに知っている箱のどれかに収められ、見ることは、知っていることを確かめる作業に変わる。一方、知識を問いとして用いるとき、それは「図鑑の説明とどこがちがうのか」「なぜこの季節にここにいるのか」といった目のつけどころを与えてくれる。前者にとって、目の前のものは、図鑑の説明と一致した時点で用ずみになる。後者にとっては、一致しないところこそが関心の的になる。知識の量は同じでも、一方では目が閉じ、他方では目が開かれるのである。

帰り道、知人は使いこんだ手帳を見せてくれた。四十年も鳥を見てきた人の手帳には、意外なことに、疑問の書きこみがいくつも並んでいた。「図鑑より尾が短い」「今年はなぜこの谷に来ないのか」。鳥の名前さえ知らない私には、そのような疑問の生まれる余地がない。尾の長さの標準を知らなければ、短いと気づくことはできないからである。知っていることが増えるほど、その外側にある知らないことの輪郭（りんかく）も、はっきりしてくる。知人にとって知識は、見ることの終点ではなく、出発点なのである。④知識は、未知のものを消し去るのではなく、未知のものに形を与えるのだ。

よく見るとは、知識を捨てることではない。かといって、知識で世界を埋めつくすことでもない。知識に導かれて目を向け、目に映ったものによって知識を書きかえる。この往復を止めないことである。新しいことを学ぶのは、世界を見終えるためではなく、世界をもう一度見直すためなのだ。見るたびに自分の知識が少しずつゆさぶられているのなら、その人は、まだ見ることをやめていないのである。

（創心館オリジナル文章）

問一　①私には見えていなかったとあるが、その理由として最も適しているものはどれか。次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　鳥が枝や新芽によく似ていて、どれほど知識のある人でも見分けることがむずかしかったから。

イ　鳥についての知識がなく、目に入る色や形の中から鳥を拾い上げることができなかったから。

ウ　双眼鏡の使い方に慣れておらず、知人の指さす場所に目を向けることができなかったから。

エ　知人のことばを聞いて、そこに鳥がいるはずはないという先入観をもってしまったから。

問二　［　A　］、［　B　］に入れることばの組み合わせとして最も適しているものはどれか。次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　A　しかし　B　だから　　イ　A　たとえば　B　だから
ウ　A　しかし　B　ただし　　エ　A　つまり　B　けれども

問三　②網とあるが、本文中で筆者は、見ることをどのような働きだと述べているか。その内容についてまとめた次の文の［　a　］、［　b　］に入れるのに最も適しているひとつづきのことばを、本文中からそれぞれ抜き出しなさい。ただし、［　a　］は七字、［　b　］は十字で抜き出すこと。目に入ってくるものの中から、［　a　］だけを拾い上げ、残りを［　b　］という働き。

a

b

問四　［　C　］に入れるのに最も適していることばを、本文の内容から考えて、ひらがな五字で書きなさい。

問五　③知っているという思いが、見ることの終点になってしまうとあるが、どういうことか。その内容についてまとめた次の文の［　　］に入る内容を、本文中のことばを使って三十五字以上、四十五字以内で書きなさい。

ものをよく知っていると思うと、［　　］ということ。

問六　本文中で筆者は、知識の二つの用い方を対比している。その内容についてまとめた次の文の［　a　］、［　b　］に入れるのに最も適しているひとつづきのことばを、本文中からそれぞれ抜き出しなさい。ただし、［　a　］は十四字、［　b　］は七字で抜き出すこと。

知識を答えとして用いるとき、見ることは［　a　］になるが、知識を問いとして用いるとき、知識は私たちに［　b　］をもたらす。

a

b

問七　④知識は、未知のものを消し去るのではなく、未知のものに形を与えるとあるが、どういうことか。その内容についてまとめた次の文の［　　］に入る内容を、本文中のことばを使って七十字以上、八十字以内で書きなさい。

知識が増えれば知らないことは減るように思えるが、実際には、［　　］ということ。

問八　次のうち、本文で述べられていることがらと内容の合うものはどれか。次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　見ることは知識に支えられているので、よく見るためには、知識を増やして世界のすみずみまで説明できるようにすることが必要である。

イ　知識は見ることをさまたげる場合があるので、よく見るためには、知識にたよらず、目に映ったものをカメラのように受け止める必要がある。

ウ　知識を問いとして用いる人は、知識の量が少なくても、知識を答えとして用いる人よりも多くのものを見ることができる。

エ　見ることは知識に導かれて行われるが、目に映ったものが知識を変えることもあり、そのやりとりを続けることがよく見ることである。

作文の型1　ことばの意味を自分で決めてから書く（15分）

入試の作文　入試では毎年、**三百字以内・二十点**（内容十四点・表記六点）。グラフや名言などの資料を読む形が多いが、資料のない一行の題の形も出ている。入試の時間のめやすは十五分。第1講では、前半の二つのまとまりを書く。

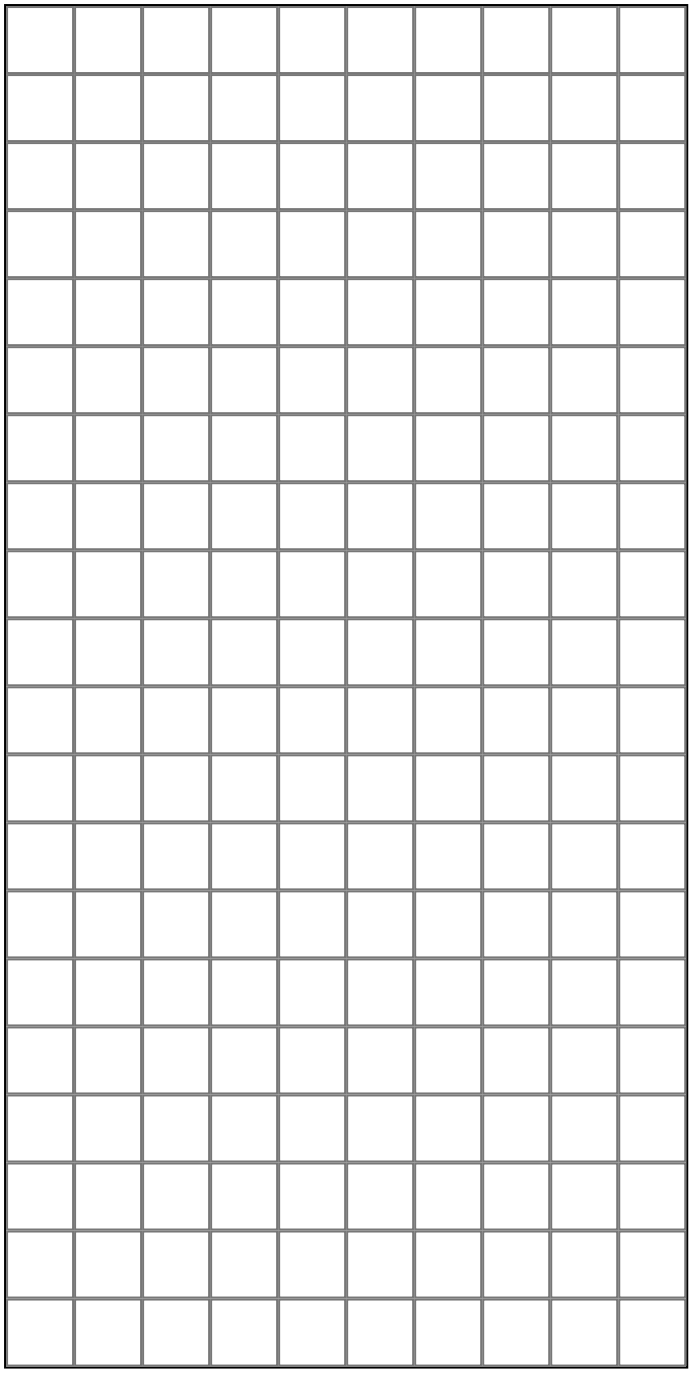
型　①ことばの意味を自分で決める（「～とは…ことだ」と一文で）→②そう考える理由を、体験や見聞で説明する→③まとめ。この①と②を書く。辞書の説明を写すのではなく、自分の考えが入った意味にする。

決まり　書き出しと段落の初めは一字あける。「だ・である」か「です・ます」のどちらかにそろえる。句読点やかぎかっこの閉じが行の頭にくるときは、前の行のいちばん下のマスに入れる。

作文1　「自立」とはどのようなことかについて、あなたの考えを、次の条件1・2にしたがって、二百字以内で書きなさい。

条件1　最初に、「自立」とはどのようなことかを、あなたのことばで一文で書くこと。

条件2　次に、そのように考える理由を、あなたの体験や見聞きしたことを挙げて説明すること。



確認テスト（10分・100点）　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

合唱の練習で、指揮をする先生がよく言うことばがある。「自分の声だけを聞いてはいけない。」歌い手はつい自分の声の出来に気を取られるが、合唱のよさは、一人ひとりが上手に歌う（A）ことから生まれるのではない。

人の声は、高さも太さもそれぞれちがう。そのちがいを消す（B）ことで全員を同じ声にそろえようとすれば、歌は平板なものになるだろう。かといって、各自が好きなように歌えば、声はぶつかり合うだけである。

合唱とは、ちがいを消すことでも、ちがいを放っておくことでもない。自分とは別の声を聞き（C）ながら、その声と重なる場所を探し続けることである。ひとりの声の中には①なかった響きが、声と声のあいだに生まれるのはそのときだ。調和とは、同じになる（D）ことではなく、ちがうまま支え合うことなのである。

（創心館オリジナル文章）

問一　本文中のA～Dの――を付けた語のうち、一つだけ他と活用形の異なるものがある。その記号を答えなさい。（20点）

問二　次のア～エの動詞のうち、一つだけ他と活用の種類の異なるものを選び、記号で答えなさい。（20点）　ア　歌う　イ　なる　ウ　聞く　エ　そろえる

問三　①なかっの「ない」と同じ働きのものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。（20点）

ア　本がない。　イ　雨が降らない。　ウ　話がつまらない。　エ　問題が難しくない。

問四　筆者は、合唱とはどのようなことだと述べているか。本文中から三十一字で抜き出し、初めの五字を書きなさい。（20点）

問五　本文で述べられていることがらと内容の合うものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。（20点）

ア　声のちがいは合唱のさまたげなので、練習でなくしていくべきである。　イ　別々の声が聞き合って重なるとき、新しい響きが生まれる。

ウ　個性が大切なので、自分の声の出来を第一に考えて歌うべきである。　エ　全員が上手に歌えるようになれば、声のちがいは自然に消える。

解答（答えと短い解き方）

第1講　論説文①　抽象的な文章を読む

コツ1の確かめ

問一　その場に応じて判断する営み

「これに対して」が対比の印。「つまり」の文の「店の主人の仕事は」のあと（十三字）。具体例は答えにならない。

問二　同じものを

同じ「つまり」の文で、向き合うもう一方の箱を見る。「同じものをくり返し渡すための機械」（十六字）。

コツ2の確かめ

問一　舞台にのせるまでは完成していない

比喩の「似ている点」を探す。説明の中心は第一文。設計図も、それだけでは建物として完成していない。

問二　めずらしい

「すなわち」のあとの「めったにない」を言いかえる。「い」で終わる五字なので「めずらしい」。

練習　論説文（入試の形）

問一　イ

第二段落「何を拾い上げるかを決めているのは……知識である」から、筆者には鳥の知識がなかったと読める。

問二　ア

A：前の考えを打ち消す逆接。B：前が理由、あとが結果なので、順接の「だから」。

問三　a　意味のあるもの　b　背景として退けている

「網」は比喩。第二段落の「意味のあるものだけを拾い上げ、残りを背景として退けている」が言いかえ。

問四　たしかめる

第五段落「見ることは、知っていることを確かめる作業に変わる」の「確かめる」。「見る」と向き合うことば。

問五　（例）目を休めてしまい、中身をあらためる必要はないと感じて、知っていることを確かめるだけになる（四十四字）

採点の要素：①それ以上見なくなる（目を休める）　②中身をあらためず、知っていることを確かめるだけになる。

問六　a　知っていることを確かめる作業　b　目のつけどころ

「一方」が対比の印。第五段落の「知識を答えとして用いるとき」と「問いとして用いるとき」のあとが向き合う。

問七　（例）知っていることを標準として目の前のものとのちがいに気づけるので、知識が増えるほどその外側にある知らないことの輪郭がはっきりし、新しい疑問が生まれる（七十三字）

採点の要素：①知っていることがあるから、ちがいに気づける　②知識が増えるほど知らないことの輪郭がはっきりする　③疑問が生まれる。

問八　エ

エ：最後の段落「知識に導かれて目を向け……この往復を止めないことである」と合う。

作文1

（解答例　百八十七字）

自立とは、だれにも頼らないことではなく、頼る相手と自分でやるべきことを、自分で判断できるようになることだと考える。

私は部活動の部長になったとき、すべてを一人で引き受けようとして、準備が間に合わなくなった。そこで仲間に分担を相談すると、作業はかえってうまく進んだ。自分にできることを見きわめ、足りないところは人に頼むと決めたとき、はじめて責任を果たせたと感じたからである。

採点の要素：①最初の一文で「自立」の意味を自分のことばで述べる　②体験や見聞が①の理由になっている　③表記。

確認テスト

問一　C　（20点）

A「歌う」・B「消す」・D「なる」は、「こと」（体言）に続くので連体形。C「聞き」は「ながら」に続くので連用形。

問二　エ　（20点）

「ない」をつけて直前の音を見る。「そろえない」はエ段なので下一段活用。ほかはア段で五段活用。

問三　ア　（20点）

①とアは、ものがないことを表す形容詞。イは助動詞、ウは「つまらない」の一部、エは補助形容詞。

問四　自分とは別　（20点）

二つを打ち消したあとの文を見る。「自分とは別の声を……探し続けること」が三十一字。読点も一字。

問五　イ　（20点）

イ：最後の段落と合う。ア：「ちがいを消す」は筆者が打ち消している。ウ：先生のことばと逆。

くわしい解き方は創心館出版の攻略テキスト（別冊解答）に載っています。